東日本大震災以後の備忘録ないしは切り抜き帳(その49)

[2017年3月6日(月)]

野蒜地区の高台移転の主な経緯/被災3県における宅地造成の進捗率 [朝日新聞(3/6)より]

○朝日新聞の連載記事『首長と震災 被災自治体の6年』と題する連載記事の2回目は『(中) 高台移転,速さ最優先 大規模事業を進める宮城・東松島市長』と題する以下の内容であった.「航空自衛隊のブルーインパルスが所属する基地は, 宮城県東松島市にある. 6年前,海沿いの市街地を津波が襲い, 1,134人が死亡した. いま,被災地で最大規模の高台移転が進む. 基地から車で10分ほどの野蒜地区. 被災地最大の高台移転は, 計画人口1,370人. 復興庁から「まちづくりトップランナー」に認定され, 昨年11月に宅地の引き渡しが終わった. 市長の阿部秀保(61)はスピードにこだわった.「話があるんです」2013年6月, 阿部は復興庁宮城復興局の局長室を約束なしで訪れた.当時局長だった沢田和宏(60)と向き合うと, 上着から「辞職願」と書かれた白い封筒を抜き出した. 「工期が遅れたら住民との約束違反です. 職を辞して謝るしかない」 当時, 現場の土砂が運び出せず, 2カ月ほど工事が止まっていた. 山を削るのに東京ドーム2.5杯分の土砂が出る.要望したのは土砂を運び出す全長1.2キロのベルトコンベヤーだ. 事業費は100億円. 復興庁は難色を示していた. 高台移転は震災のわずか2カ月後に12地区の行政区長が「早く決めないと住民が散り散りになる」と望んだものだ.自分を辞めさせれば復興庁に傷がつく.そう踏んで賭けに出た. 局長の沢田は「早急に整理します」と応じ,国土交通省の担当課長に電話した. 2カ月後,ベルトコンベヤーの導入が決まった. 「スピードを金で買った」と阿部は言う. 事業費は全額国費で630億円.計画戸数は448戸. 単純計算で1戸あたり1億4千万円になる. 高台はもともと, 特別名勝松島の一角だった. 震災の48日後, ヘリコプターで野蒜地区を視察した当時の文化庁長官, 近藤誠一(70)は, 一面に広がる水面に家々の屋根が点々と浮かぶ光景を覚えている. その視野に高台が入った. 「あそこしかないな」近藤の独り言を, 同乗した市長の阿部は聞き逃さなかった.「住民懇談会を始めますよ. いいですね」 時間が経つほど民意がまとまりづらく, 避難先の生活に慣れて,本格的な生活再建が遅れる. 当時,国土交通省都市・地域整備局長だった加藤利男(64)は「スピーディーに各地の計画をつくるように口を酸っぱくして言った」と語る. 野蒜地区には高台移転を望まない住民もいた. 一部は「いまの場所に住み続けたい」と要望書をまとめた. その数636人分. しかし,市は地区の津波浸水域を災害危険区域に指定. 自宅の再建には, 1階の床面を道路から1.5メートル以上高くすることを義務づけた. 要望書を出した男性(68)は「市のやり方は半強制的だ」と批判する. 被災3県では新しいまちが出現しつつある. 高台移転と土地のかさ上げによる宅地造成は19,385戸が計画され, 3月末までに69%が完成する. 災害公営住宅も含めると,投じられた国費は2兆円. 復興庁の前事務次官の岡本全勝(62)は「地元に住み続けたいという情念と,経済合理性は比較不能. それを決断するのが首長の仕事だ」と語る. ただ, 宅地ができても,住民が戻らないという課題が浮かびつつある. 約1,180億円をかけてかさ上げと高台移転を進める岩手県陸前高田市. 造成する約300ヘクタールは被災地で最大規模だ. しかし,地権者の意向調査では造成宅地の4割で利用の見通しが立っていなかった. すでに別の場所で自宅を再建した人が多かったという. 市長の戸羽太(52)は「待ちきれずに苦渋の決断をした人もいる」と残念がる. 東松島市の野蒜地区では87%の宅地が埋まり, 住宅を建てる槌音が響く. 阿部は4月28日で3期目の任期満了を迎え市長を退く. 「過去に例のない事業. 復興増税を受け入れてくれた国民のためにも,被災地全般のまちづくりを検証し,今後の防災に生かしてほしい」=敬称略(署名記事)」

[2017年3月9日(木)]

○3月7日付けの朝日新聞には『首長と震災 被災自治体の6年』と題する連載記事の3回目『(下) 庁舎保存, 民意は割れた 同じ結論にたどり着いた2人の町長』が掲載されていた. 以下に転載させて頂く. 「民意が割れたとき首長はどう判断するべきか. 被災地の2人の町長は正反対の立場を歩みながら同じ結論にたどり着く. 1人は宮城県南三陸町長の佐藤仁(65). もう1人は岩手県大槌町長の平野公三(60). 2人はあの日,それぞれ庁舎の屋上で生き延びた.佐藤は南三陸町の防災対策庁舎の屋上にいた.家屋をなぎ倒した津波はしぶきを上げ屋上を越えた. 頭まで水につかったが,波の上下で呼吸できた. 屋上にいた職員ら43人が流されて死亡した. 同じころ, 約80キロ北の大槌町の役場庁舎の屋上には総務課主幹だった平野がいた. 黒い壁のような波が押し寄せ, 周囲は海になっていた. 町長と職員39人が死亡・行方不明になった. 職員たちが命をつないだ庁舎

は，その後，町民の対立の舞台となっていく．南三陸町の佐藤は「あの建物は将来の教訓になる」と保存を望んだ.しかし,遺族から「見るたびに悲しくなる」との声が上がり，職員は「復興事業の妨げになる」と指摘した.建物の周囲はかさ上げが予定されていた．2013年9月の記者会見で,解体を発表せざるを得なくなった.大槌町の平野は解体派だ.15年8月の町長選で初当選すると「肌感覚では町民のほとんどが解体だ」と述べ解体に向けて予算案を出すと宣言した．しかし震災から4年がたち,民意は揺れ動いていた．町長選と同時の町議選で議会の顔ぶれも変わり，保存派が増えていた．平野は激しい反対にあった．初当選から3カ月後,高校生10人と意見交換する機会があった．全員が「後世のために」と保存を求めた．平野は机をたたき「あの建物のそばを通れない町民の気持ちを，考えたことがありますか」といらだちをあらわにした．解体を迫られた佐藤．保存を迫られた平野．遺構をめぐる民意のはざまで判断を迫られた首長は，70年前にもいた．「いずれが正しいとか間違っているとかいう問題ではない」 1947年から広島市長を通算4期務め「原爆市長」と呼ばれた浜井信三．自著で書いたのは原爆ドームの保存をめぐる問題だ．戦後6，7年が過ぎて復興計画が進むと,「悲惨な思い出は早く取り除いて」と解体を求める声と,「世界平和への反省の起点に」と保存を望む声が高まった．浜井は当時，保存にも撤去にも費用がかかるとして，そのままにしておくという政治判断をした．10年ほどたつと，被爆者団体も保存運動に加わり始めた．補強できることもわかり，約20年後の66年，浜井は保存を表明した．震災遺構の保存を模索していた宮城県知事の村井嘉浩(56)は，この広島市長の知恵にたどり着いた.「冷却期間を置くのに県で預かるのも手かと」．20年後の2031年まで県有化し,それから保存の是非を判断することを提案した．これを受け,佐藤は15年6月,提案の受け入れを表明した.「残す,残さない,どちらとも正しい．時間をかけて,将来が見えるようになってから考えるべきだ」大槌町の平野も先送りを決断する．昨年4月，全議員が町民から聞き取りをすると,「将来考えればいい問題」という町民も多いことがわかった．議会は保存派と解体派に割れていた．昨年11月,正副議長と議長室で向き合った平野は「解体予算案の12月議会への提出はしない」と告げた．議長は「我々も民意を受けた存在．もう少し待った方がいい」と応じた．旧役場庁舎の前には献花台が設けられ，訪れる人が絶えない.「犠牲になられた職員の一人一人の顔を思い浮かべると，あの日,生き残ってしまった後ろめたさを感じています」 1年前の3月11日，献花台での平野の言葉である．=敬称略(署名記事)」

［ 朝日新聞（3/7)より ］

午後 2 時 46 分，仙台市青葉区一番町 3 丁目のサンモール一番町にて[河北新報 3/12 より]

午後 2 時 46 分，東京・銀座で黙とうする人々(魚眼レンズ使用)［東京新聞 3/12 より］

［2017年3月13日(月)］

〇東日本大震災から６年目の数日を仙台周辺で過ごして，しばしの間，3.11の津波災害のことに集中することができた．地震発生時刻の午後2時46分に併せてサイレンが鳴り響き，昨年の東松島市野蒜地区に続いて,今年は偶々立ち寄った女川漁港で黙とうを奉げることとなった．上の左の写真は，昨日の河北新報に大きく掲載されていた仙台市の繁華街サンモール一番町の黙とう風景で，紙面を開いた途端に強い衝撃を受けたものであるが，右の東京銀座での黙とう風景と比べてみると，東日本大震災に対してかなりの地域による温度差が感じられる．致し方ないことではあろうが….

[2017年3月16日(木)]

田老地区の防潮堤の上に並んで犠牲者の冥福を祈る住民ら
=11 日午後 2 時 50 分ごろ [河北新報 3/12 より]

○先日，東日本大震災から６年目の黙とう風景について述べさせて頂いたので，同じ河北新報に掲載されていた田老での黙とう風景についても触れておきたい．記事によれば「東日本大震災の津波で181人が亡くなった宮古市田老地区で11日,住民や復興工事関係者約500人が『万里の長城』に例えられた高さ10mの巨大防潮堤で鎮魂の祈りを込め,手を合わせた.(途中略)防潮堤の海側には高さ14.7mの新防潮堤が姿を現し始めた．現段階で130mができており,2018年度末までに総延長1.2kmが完成する予定.17年度中にも現在の防潮堤からは海が見えなくなる可能性があるという」とのことであるが，地元では早くも「海が見えなければここで追悼する意味はないのでは」との声が上がっているそうである．

文科省委託研究の報告会が行われた東大安田講堂の外観(左)と内部(右)

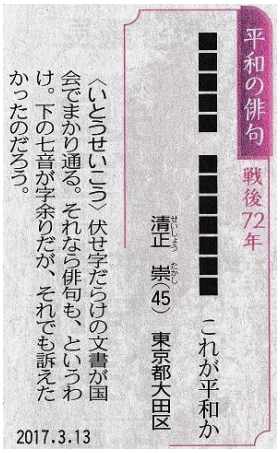
○一昨日の3月14日に,『都市の脆弱性が引き起こす地震災害』と題する報告会が東大本郷の安田講堂で開催されたので参加させて頂いた．この報告会は，文科省が東大地震研，京大防災研ほか多くの国や大学,民間の研究機関に委託して5年間を費やして行った「都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト」の最終成果報告会として企画されたものであった.プロジェクトは3つのサブプロジェクトから成っていて,①首都直下地震の姿とその影響(代表:東大地震研,平田直教授),②都市施設の崩壊余裕度と健全度判定(代表:京大防災研,中島正愛教授)，③大規模被害の発生を前提とした災害からの回復力の向上(京大防災研,林春男特任教授)などの成果報告のほか，理化学研究所AIPセンターの上田修功氏による『理研AIPセンターにおける防災・減災研究の取り組み』,ソフトバンク㈱ビッグデータ戦略本部の柴山和久氏による『災害時におけるビッグデータを活用した防災分析』と題する特別講演，そして後半ではパネルディスカッション『超スマート社会における防災・減災のあり方と実現に向けて』が準備されていた．研究成果の詳細については恐らく入手する機会があると思われるのでここでは割愛して，筆者が受けた印象のみを幾つか述べさせて頂きたい．平田氏のお話の中では，来たるべき首都直下地震をイメージする上で，1855年の安政江戸地震に注目されている点が興味深かった．中島氏のお話の中心はE-ディフェンスを用いた各種建物の検証結果の紹介であった.PDの前に質問票の提出が求められたので,筆者は「E-ディフェンスは本当に科学なのだろうか」と記入したところ，PDの司会者は数ある質問票の中からそれを取り上げ朗読されたため，フロアからは爆笑が起こった．中島氏は回答に困っておられたが，司会者は質問者の真意を確認されなかったので議論には発展しなかった．筆者の質問の意図は,①実際の地面に建つ建物と,振動台の上に固定される建物モデルとは,互いに似て非なるものではないのか，②よく吟味された解析結果と,周到に準備された実験結果が仮に良く合致したとして,それは当然の結果であって,巨費を投じてまでやる必要があるのだろうか,など相当な皮肉を込めたものであった．もう一つ気になったのは,どなたも『都市の脆弱性』の定義について言及されなかったことで，この巨大研究プロジェクトによって『都市の脆弱性が引き起こす地震災害』の主要部分が本当に題材として取り上げられたのかどうか確信が持てるのだろうか．PDの最終段階では講師の間で議論は大いに盛り上がり,次のような発言には共感が得られた.(林氏)災害が起こるまでは自然現象だが，災害が起こった後は社会現象である.(上田氏)災害は負の宝くじ.(柴山氏)最近の若手は言われたことはきちんとやるが新しいことは苦手.人材育成が最重要課題.大学教育に問題があるのでは？(上田氏)ものづくりは得意だが,サービスは苦手．これらの議論も含めて,特別講演の内容も甚だ興味深いものであったので，ウェブサイトで公開して戴ければ誠に幸いである．

[2017年3月19日(日)]

○今朝の東京新聞“筆洗”には心に響くものがあったので,そのコラムを転載させて頂きたい.「小学校の卒業式でよく行われる「呼びかけ」．卒業生たちが短い文章を分担し声を出し,ときに声を合わせ,六年間の思い出などを語っていく.「楽しかった！」「修学旅行！」．戦後,どこかの小学校が導入し，全国に広まったと聞く▼卒業式のシーズンがやってくると，同い年の友人は決まって，この「呼びかけ」の思い出を語りたがる.なんでも友人に与えられた呼びかけのせりふは「そして！」のみだったそうだ.「たった三文字の接続詞

だよ」．四十年も昔の力不足をいまだに嘆いている▼三月には喜びの色と悲しみの色が混じり合っているようである．卒業や新しい進路に胸を躍らせる若者がいる．その一方，進学，就職などで望んだ通りの道を歩むことがかなわなかった若者がいる．挫折に声を上げて泣く者もいるだろう▼あの友人は気に入らなかった「そして！」を誰よりも大きな声で発し，絶賛されたそうである．何のことはない，自慢話なのだが，担当した「呼びかけ」の言葉が何であったか，思い出せぬ身にはちょっとうらやましい思い出でもある▼考えてみれば，「そして」とは深い言葉かもしれぬ．その接続詞の後には，自分次第で変えられる未来や可能性がある▼挫折し「そして，泣き続けた」と続けるのか．それとも「そして、立ち上がった」と続けるのか．三月の「痛み」にこの三文字を贈る．」

○ついでながら，余りにもお粗末な最近の安倍政権を揶揄する話題を，東京新聞の紙面から幾つか拾ってみた．くだらな過ぎてコメントする気力もないが，備忘録には残しておきたいものばかりである．



平和の俳句　戦後72年

■■■